

# 生きること死ぬこと

98K020 星 弘子

## 序文

恐ろしいほどの凶悪犯罪や、軽い気持ちでもたらされた悲しい事件、未成年による犯罪が入り乱れている近年、人々の死生観はどのようなものなのだろうか。そしてそのような時代の中で私達はどうか生きていくべきなのだろうか。流れつづける時の中でこれから生きていく私達に少しでも考え、その想いを深める時間も時には必要なのではないかと考えている。

生きていく上で大切なものはいくつもある。それは自分で気付くこともあるだろうし、他人によってもたらされるものもあるだろう。まだたった22年しか生きていないが何人かの人に私は影響をもたらされた。そのうちの一人は、ちょうど2年前に他界してしまった私の父である。父は数え切れないものを与え、残してくれた。その中でも大きく心の中にいつまでも残っているものは父の生きる強さである。55年という決して長くはない人生を彼は全うした。苦しいとは一度も言わずに、ただただ前向きに生きていた人だった。その上、苦しい自分をよそに人々に優しさを与えてくれていた。そんな父を私は今でも尊敬している。父のように強く優しい人間になりたい。そして、中身のある生を全うし偉いという意味ではない、人として大きいと思える人間になりたいと願う。また、二人の学友も先日若くして亡くなってしまった。彼らの生も長くはなかった。しかしその生き様は見習わなければいけないと強く感じるほどだった。どちらも病気をかかえながらも、できる事はできるところまでなるべく自分でしようとしていた。そしてそれに意固地になるわけではなく、周りの人々と楽しみながら生活していたように感じる。彼らもまた、素晴らしい影響を私達に与えてくれた。そこに直面した時私は今こそ生きていく事、そして死ぬ事についてよく考え、その想いを深めることのできるチャンスなのではないかと感じた。それゆえ卒業論文という大きな節目の時にこの問題を考えることにしたのだ。

しかし「生きる事死ぬ事」の決まった定義などはないのではない。私はこの論文により答えを見つけたいというわけではなく、ただこの問題を考え、見聞を広める事により、たとえこれから先に苦しみや逆境の中に陥ってしまっても、生きる勇気が湧くであろうと思ったのだ。また決して逃げてはならないと思うであろう。そして奥の深い時間を過ごすことができるようになるだろう。さらに、死に対する恐怖がうすれ、むしろどのようにして満足の行く人生を送り、充実した死を迎える事が出来るのか、その考えにむかい善い日々を送るようになれるであろう。

第1章は生命を授かり今ここに生きている事について考察するとともに、学友の死によって考える事のできた生命観、生き方を私なりに考えていきたい。第2章では現代と昔の人ではどのような人生のとらえかたの違いがあるのか、戦時の想いや、その基となる当時の生活、今、そしてこれから先を担う若者の考えを『生と死の極限に生きて』（長谷川栄作）の文献、アンケートをもとにまとめたい。第3章では死によって与えられるものは苦しみ悲しみだけなのかということを考えてい。

内村鑑三は「文章は覚悟なり」と述べている。

自分の人生にとって意味の深さを書き記す。

この卒業論文にはそのような意味を込めたい。

## 第1章 生きる事

### 1. 生命を授かった私達

生を与えられ、人は何を思うのか。

生命を与えられた瞬間からそれぞれは一生という時間を与えられる。それはどのようなものなのだろうか。我々が生きていく中で、辛い事と良い事を割合で示すなら、むしろ辛い事のほうが多いだろう。しかし、辛い事があるからこそその中で幸せを感じることができるのだ。つまり苦しい事から逃げようとしてはいけない。どう乗り越えようかと試行錯誤することによりその経験を通してよりよい人生を自ら創り出していく事ができるのである。

毎日あたりまえのように過ぎてゆく日々の大切さを考えたり、感じたりしたことがあるであろうか。「生と死は常に背中合わせである」などと思ったことがあるであろうか。この問題定義をしたからといって常にそういうことを考えなさいと言っているわけではない。生きている事をあまり重く受け止めすぎてもいけないと思うのだが、時として私は考えたくなるのだ。私達に明日がないということを考えるわけではないし、死がせまってきていると考えるわけでもない。ただどうすれば充実した日々を過ごし、前進できる自分になり、後悔しない日々を作れるのか考えたいのである。このように考えたのは若くにして亡くなった私の父や、学友の生き様から強い生命観を感じたからである。

私の友は22歳という若さで亡くなってしまった。突然の出来事であり、私は戸惑いを隠せなかった。しかし彼女は短い人生を人の何倍も精一杯生きた。限りある人生の中で彼女は決して病気に甘んじることなく出来る限りの挑戦をし続けたに違いない。

また時を同じにして、もう一人の学友も21歳で亡くなった。彼とは時々授業が一緒であった。見るからに病気である事がわかる彼であったが、ついていけない授業は録音し、英語の授業では出来る限りの事をし、その頑張りひしひしと伝わってきた。あるとき小さな子供を見て彼は「子供ってかわいいですよ。僕子供好きなんです」とにっこり微笑んだ。そんな彼のレポートの中には「自分の人生を恨まない」と書かれていたと後で聞いた。本当は恨みたくなくなるような自分の運命を彼は誰にも負けない位一生懸命生きたのだ。

### 2. 生きる強さ

さて、ここで前文にあげた敬愛する友が書き残した二つのタームペーパーの一部を紹介したい。まず、これらのペーパーを読んで感じた事は本当に良く勉強し、理解し、考えているということである。そして彼女は間違いなくそれらを更なるステップアップとして受け止め、前進している。一つ目は「ルターの宗教改革から学んだ事」で彼女が述べた事である。ここで彼女は『無者のための福音<sup>(1)</sup>』をよくよんでいた。課題に対して彼女の解釈がきちんとなされているのはもちろんの事、その中でとても考えさせられた文があった<sup>(2)</sup>。

この本を読んでいく中で、共感するものがあつた。本文の中の「倫理というものは、ややもすれば行為の正当化に墮しているのではないのでしょうか<sup>(3)</sup>」というところである。たしかに私達人間は、自分の行為の全てを正当化したいと思うだろう。そして正当化するために倫理をもってくる。これでは真実が倫理によって見えなくなってしまうのである。人間は弱いものである。そして時に真実は残酷であるが、我々人間は真実から目をそむけてはいけないのだ。なぜなら人間は真実や正義なしには生きていけないからだ。この社会が全て嘘や偽りでつくられた社会であるとしたら、人間は何を信じ、何を求めればよいのか分からなくなってしまおうだろう。だから私達は真実を求め、信じるのである<sup>(4)</sup>。

私はこの文章の中で彼女が現実を受け入れる強さを持っているのだと心の底から感じた。心臓の弱かった彼女は誰から見てもか弱そうであった。しかし彼女の内は強かったと思う。強くあろうと努めたのだと思う。それは「時に真実は残酷であるが、我々人間は真実から目をそむけてはいけないのだ」という部分からも感じられる。彼女におきかえてみると彼女の受けた真実は残酷なものであっただろう。目をそむけてはいけないという言葉は私には、目をそむけたくない、そむけない！という彼女の強い意志が込められているように感じられる。

そしてさらに、それを強調するようにこのペーパーはしめくくられていた。

マルティン・ルターの宗教改革で学んだ事があった。それは「自己を見つめ直しなさい」ということである。自己を見つめなおすという事は、自己を知る事であり、真実を知ることである。そして、いかに真実というものが人間にとって大切かという事を知った。そして真実は普遍的なものであり、正義だという事を知った<sup>(5)</sup>。

これを読んだとき、何ともいえない気持ちになった。同じ歳なのに彼女は思慮深く、その意図は固く、まっすぐに前を見ていた。出来る事ならばもっと彼女と話したかった。しかし彼女はもういない。それが真実である。この悲しい真実から目をそむけてはいけない。まっすぐに前を向いていこう。それが彼女の伝えてくれた真実ではないだろうか。確かに私達人間は弱い生き物である。だからこそそれを受け入れ、それならばどうするべきかを考えればよいのである。

二つ目は「私が仏教から学ぶもの<sup>(6)</sup>」についてである。このレポートには仏教に関する見解が適切に述べられ、そしてその学びから得たものが鮮明につたえられている。この抜き出しは少々長くなるが彼女の残した想い、本心をそのまま伝えたいと思ひ意見の部分をそのまま抜き出してみようとおもう。このレポートの中には精神的な学びと、仏教の日本における文化的要因が書かれているのだが、その中で精神的学びについて転写してみた。

私は、仏教から現実での葛藤や苦悩からどうやって抜け出すかという方法を学んだ。それは「空は空自らを空ずる空」である。つまり現実でぶち当たる壁、絶望、これらは人が人であるからこそ起こるものである。しかしこの苦しみは長くつらい。この苦しみを解消するには、その現実を否定する事である。そしてその否定によって軽くなった心で、もとの自分を取り戻すのである。そして否定した事によって軽くなった心で再び冷静に自分を見つめることができる。だから現実を否定したことを再び否定する事で自分の壁を超え、やっとここで苦しみから抜け出せるのである。私達は現実を否定することは時々するが、それを否定する事はない。私達は、ただ現実から逃げ、ただ正常な心で生活しているだけで何の問題の解決も行っていないのであるということを知り、学んだ。また一度否定したものを更に否定するという一見無意味なようなことが自らを前進させるものであるということもここから学んだ<sup>(7)</sup>。

これを読んだ人々は何を感じるであろうか。深くうなずくであろうか。それとも大きく首をふるであろうか。私は前者である。私にはなぜこのような考えが浮かばなかったのだろうか。実は私も同じ学びをしたことがある。しかし私にとってその解釈は難しく、彼女のように理解できなかったし、しようとしなかった。「空は空自らを空ずる空」という言葉一つのなかにそれほどまでに深い解釈を見いだすことが私にはできなかった。

そしてこのレポートの結語に「私は仏教からただ否定することが大切なのではなく、二重否定をすることが絶望から立ち直るためには必要であるということを知り、学んだ<sup>(8)</sup>」とある。この「絶

望」「立ち直る」という言葉の中にはどのような意味が込められているのであろうか。これは憶測にしか過ぎないが、彼女自身の運命に対する気持ちではないだろうか。

二つのレポートを合わせてみると、一つ目のレポートには「残酷な真実から目をそむけてはいけない」とあり、もう一方には「絶望から立ち直る」とある。生きる事に対する彼女の真摯な心が伝わってくるようだった。しかしどちらも前向きな意見であり、後退的な意見は一つもなかった。前文で彼女は強いと述べたが、強いというより強くあろうと努めたというほうが当たっているかもしれない。彼女のレポートの中にあつたように人間は弱いものである。同じ人間でもそこからどうするかにより歩む道は変わってくる。一生の価値は誰も決める事はできない。つまり後悔のない人生を創るのは自分次第である。同じ一生ならば前を向いていきたい。それを教えてくれた彼女を忘れる事はないだろう。そして彼女の言葉を心にとめ、できる限りの精神力を尽くし、彼女達の方も精一杯生きていきたいと思う。

今回これらのレポートを読む機会を与えられた事と、たった一度きりの人生の中で彼女に出会えた事に感謝し、これから先あるであろう真実と向き合いながら生きて行こうと思う。

昔だれかの言葉にあつた。「充実した一日が充実な眠りをもたらすように、充実した毎日が充実した死をもたらす」と。意味は言葉の通りである。どんなに短い人生であったとしても充実した日々を送る事によって最後に残るものは悲しみや苦しみだけではなくということではないだろうか。生きた長さは関係ない。いかに真実を認め、それを受け入れ、生きる道を見つけたかである。

今、病氣と戦い、そこから逃げることなく生を全うした父と友人の生きた時間を、少しでも共に過ごせたことを感謝している。

### 3. 生きている事

なにはともあれ私は「今」を生きている。ただ時代の流れに沿って生きていくのは嫌である。多くの事を学び、吸収し自分の考えと、結び付け精一杯生きたいと思っている。高校時代の友人が卒業の最後に残した言葉に「やりたい事ばかりしている人はやりたい事すらできなくなる」というものがあつた。私はこの大学で送った四年間でそれを痛いほど痛感した。今ではこの敬和学園大学で時を過ごせた事に感謝しているが、懇願して入学を決めたわけではなかった。しかしここで得たものは山ほどある。ここでしか出来なかった事もいくつもあるだろう。つまり、何事も自分にとって歩きやすい、良い道だけが自分の道ではないという事である。

生きている事、そこには多くの事と向き合う事のできる時間があるという事ではないのだろうか。このことを私達の世代よりずっと前の世代の人が書き残した戦争体験を読む事で世代を超えて普遍的に妥当することを次章で学びたい。

## 第2章 昔から今

### 1. 戦時の生活、想い（『生と死の極限に生きて』—長谷川栄作）

この本の著者長谷川栄作氏は1917年に、新潟県北蒲原郡聖籠町に生まれ、1937年徴兵令第7条により新発田歩兵第16連隊に入隊し、1946年陸軍准尉で終戦完結業務を遂行し免職した。そしていくつかの役職を経て、1982年から1994年まで聖籠町長を務め、1995年には敬和学園大学名誉文化博士となった。長谷川氏は戦争という悲しい歴史の中を生きてきた人物である。

本書の中には大きく分けて五つの事が意味されている。それは、戦死された、戦友の死につ

いて納得をした確証と意義づけであり、生と死の極限である戦場において若者は何を考え、どのような生き方をしたか、そして参戦をした立場で戦場の実相を明らかにし、また後に物語的に誤ったり、歪められたりしないように戦友の名誉を確保しておくとともに、戦争というものがいかに苛酷、凄惨なもので愚かなものか、空しいものであるかが書きあらわされている。

著者は未だ弾片が体内に残り、病気の後遺症、呼吸器疾患等で苦しんでいるのだが、本書の中には<sup>(9)</sup>「それ以上に苦しいことは心の傷である。異国の地、戦場では連隊将兵六十余名人達がひたすら祖国と同胞に想いを寄せて青春の血を流し、散っていった。私が確かめ、納得をし、確証を得たいのは、いなくなった戦友の死は何のために、誰のために死なねばならなかったのか、そしてその死の代償は何であったのか、またその死について国民は、国家はどう考えているのか。我々の青春を奪い、燃え尽くした価値は何であったのだろうか。私はその確証が欲しいのである」とある。

現代で「心の傷」について尋ねたならば、きっと多くの人が自分自身、個人の事に関する心の傷であろう。しかしここでいわれる心の傷は、個人の苦しみではなく戦争という歴史ゆえに与えられてしまった傷なのである。当時の人々が持った悩みも個人のことというよりも、生きていくために食べていく事とか、戦争に行ってしまった大切な人の事、家に残してきた家族の事、などだったのではないであろうか。そう思うと今小さな事ですぐに傷ついてしまう自分が小さいものと感じる。

前章では私の学友について述べたが、彼女達は21歳と22歳であった。しかし戦争ではもっと若い青年や、少年少女達が亡くなっている。なぜに死なねばならなかったのか。彼女達と戦争で亡くなった人達を同じ枠の中で考える事はできないのではないだろうか。その苦しみはまた別である。今のように自由はなく、自分のやりたい事が出来なかった時代だったであろう。著者の年代は明治維新以後間もない大正、昭和の初期に生まれ、国の定めた方針に従った教育を受け、真面目に生きていたという。著者がいう「死の代償」は自分の意思ではなくなくなった人々の悲しみが込められているように感じる。そして今後も引き続き我々が考えなくてはいけないことが本書では示されている<sup>(10)</sup>。「我が国も戦後五十年を経て戦争の事実は風化しつつある。それにも拘らず今なお戦争責任を問われ、国の政権が代わる度毎に謝罪外交の行脚をしている。国民は懺悔をし、当時の責任者も命を賭して戦後処理をした筈である。国家としても平和憲法に徹し、謙虚に反省をして世界のどこの国よりも平和を愛し、また世界の平和社会に貢献している。」

戦争責任はしばし耳にする言葉である。戦争による悲劇は数え切れないものである。苦しみを与えられた側の言い分も間違っていないだろう。憎しみはなかなか消す事は出来ないが、それをいつまでいっていても終わる事のない問題であり、それならばどう乗り越えるかを考え共存していくのか考えるべきではないだろうか。惨劇が全くなかったとはいいきれないであろう。しかし著者はその気持ちを次のように述べている。「黙って聞いていると侵略だ、略奪だ、虐殺だ等々、戦場における異常行動を暴きたてている。これがいかにも第一線将兵の全ての如くに聞こえてくる。このままでは亡き戦友の霊が浮かばれない。生き残った我々も黙っているわけにはゆかない。あの世に行って合わせる顔がない。戦友からは何のために生き残ったのかと叱られる。」戦争による苦しみはだれもが消す事の出来ないものである。私の祖母も戦争の話をする時、切ない思いや生活を語ってくれた。高校生の頃に行った広島平和学習では戦争体験者が切々ともう二度とこのような事を繰り返してはならないと苦しいながらも語ってくれた。し

かしあまりに残酷な話が故に語りたがらない人達もいるそうだ。

このように今のわが国では考えられない生活をしてきたこの当時を生きた若者は今の私達とは全く違う世界観人生観をもっていただろう。どちらかという私達よりも数段も我慢強く誠実にいきた人が多かっただろう。生きるという事が大切で日々一日一日を踏みしめながら生きてきたのだろう。そのような時代とは対照的に自己中心的な凶悪犯罪や悲しい事件が続く現代、私達は命というものをどう受け止めればよいのか深く考えなくてはいけない。

先に触れた長谷川氏の著書の中に「何のために生き残ったのかと叱られる」とある。著者には生きる使命がある。その一つは戦争を正当化とまではいかずとも、お国の為には戦い、命を落としてしまった人々の代わりに残酷な戦争の裏にある更なる辛い物語を残さなければならない事ではないだろうか。

戦争は多くの人の人生を変えた。戦争によって生命を絶たれた人もいれば、戦争で大切な人を無くした人、今もなお戦争の苦しみを抱えている人、また、戦場に行き生き残りその罪にさいなまれている人たちもいる。本書の一節に「我々は個人の私利私欲のために戦場に立ったのではない。紆余屈折があり、民族、宗教、領土、経済、思想等の多種多様のことが介在してくる。しかし、我々は今でも御国の為には戦ったと思っているし確信をしている。絶対に間違いのない事実である。他国を傷つけ、侵略するために戦ったとは考えていない」とある。戦争に対する人々の考えは様々だが、著者は「少なくともあの場合、我々が戦場に立たなかったら果たして日本はどうなっていたであろう」とある。戦争は望まれたものではなかった、好んで苦しみを生んだわけではない。しかし、あの時代だれも日本のために戦おうとしなかったなら今の経済発展どころか人々の生活、世界での日本の立場も、もっと後退的であっただろう。

今戦時中の体験について長谷川氏から学んだ。そのことにより私は現代における生き方についてなにか教えられたような気がした。それを次に自分の感じたままに展開してみようと思う。その際私が集めた母や友人からの生命観に関するアンケートを用いてみたい。

## 2. 現代

もう一方で現代について考えてみたい。

今という時代は自由にあふれている。しかしその自由というものが本当に有効利用されているのであろうか。そしてその自由の意味を取り違えてはいないだろうか。先日起こったアメリカNYでのテロ事件にしても多くの過ちが含まれている。悪いのはテロ組織だけではないであろう。確かにあのような凶悪な事件を起こしたテロ組織の罪は計り知れない。しかしその行動を起こさせた側にも少なからず要因があったであろう。日本も米国に原爆投下などひどい事をされた。しかし逆に日本もパールハーバー攻撃など米国に対して卑劣な事をしてきた。

## 3. これから

過ぎた事は何とも言う事はできないであろう。それならばこれからをどう変えていけるのかを考えればよいのではないだろうか。そこでわたしがいつも思うのは私達が勉強してきた文明間対話である。国際化社会が進み、様々な場において異なる国の人々が交わる機会が増えた今、大切なのは対話である。まったく別々の文化の中で生きてきた人々がお互いを理解するというのは困難なこともあるであろう。自分達の今まで生きてきた世界にはなかった事を、考え、理解できない事もあるかもしれない。

私達日本人にはあまり理解できないかもしれないが、その中でも宗教間対話は欠かせないものである。相手の信じる神を自分も信じるという事ではない。ただお互いの信ずる神について理解を示すべきであると思うのだ。現に多くの国で宗教戦争が存在する。しかし、お互いを受け入れる事によって話し合いもスムーズにできるようになるだろう。

少々スケールの大きい話しだと思ふかもしれないが、これは国と国の事でもあり、個人と個人のことでもあるのだ。

#### 4. アンケートをもとにした考察

##### (1) 十代の若者

人それぞれの考え方は違うが参考までにいくつかの意見を聞いてみた。

まず一人目は19歳の男性である<sup>(41)</sup>。高校を卒業し、社会人一年目の彼は他の19歳の人よりも少々大人びている。家族は健全であるが祖父と学友が亡くなった。人の死に直面してみて生まれてくるのは大変なことなのに対し、人の死とは簡単なものだと感じ、生きるということを大切にしたいと思った。それゆえ自殺は彼の中では許され難い行為だという。

死に対して、彼は恐怖であると答えた。その理由はどんなに生きても遣り残した事がありそうだから。また、死んだ後、周りの人に忘れられるのが怖い、忘れられないくらい人に想われないのだそうだ。しかし、これについては「人は忘れられてそれが巡りめぐるものなのだ」という人もいる。それは私の母なのだが、母は義父を亡くし、実父、また夫も亡くした。多くの悲しい死に直面した母は他の人の死によって与えられるものがあるという。そしてそれは必ず自分の身になるのだと。

これはあくまで彼女の意見である。前者の彼はそれだけ生きたい、強くありたいと願っているのであろう。それは良いことである。

彼は歳をとったら死ぬことは恐怖では無くなるであろうと感じている。充分生きたと感じる、しかしもっと生きたいとも思ふかもしれないと想像している。これを受け、私は生きる強さを感じさせられた。未来に感じる希望、願望。そこにはまだ見えぬ彼の人生を覗かせるものがあった。

長く生きればいいというわけではない。前文で述べたように「充実した一日が充実な眠りをもたらすように、充実した毎日が充実した死をもたらす」とあるが、その中身をいかに充実させるかである。長く生きて何をしたいのかという問いに彼は、両親・自分でこれから作るであろう新しい家族と仲良く暮らし、日々精進し、常に目標のある自分でいたいと答えた。小さな喜びを大きく感じる。これは素朴な喜びではあるが、難しい事ではないかと思う。

日々ありふれた喜びはなかなか考える機会がない。この質問をしなければ「生きる」ということについて深く考えなかつただろうと彼は言う。

「あまり生きる事に関して考えていなかった。死ぬことの恐怖ばかり考えてしまう。人は死ぬために生きているのではないのだろうか。」死ぬのが怖い、つまり忘れられるのが怖い。今が楽しいからそんなことを考えたくはないのだが、楽しいからこそ今共に過ごしている人に忘れられたくない。余談ではあるが、人に忘れられたくないという彼はそれだけ寂しがりやではないかを感じる。

生きる事の意味を考えるのは楽しいのではないかと思うのだが、それは考え出すと難しく、奥が深いのだという。

まだまだ彼は十代である。生きるパワーの満ちあふれた今を大切に生きて欲しい。

## (2) 私の母、52歳が思う死生観

私の母が思う死生観について、聞いた話をまとめてみた。

まず、私と母は先日亡くなった私の学友について話した。頑張りやだった学友について、母は、「死ぬと分っているからこそ一生懸命なんにでも取り組み、自分に取り入れようとするのではないか」と言った。死ぬとわかっているならば面倒くさいことなどしなくてもいいのかもしれない。けれども限りを感じているからこそ生きている間にしかできないものを、生きている間に精一杯するのであり、一度きりの人生だからこそ人生の中身、人間としての中身を豊かに、豊富にしたいのではないのだろうか。けれども、それは死を目前にした人だけではない。母はとても活動的なひとである。最近、習字を習いはじめたのだが、この歳になればもう勉強などしなくてもいいのかもしれないが、人生一度なのだから自分を高めたいと母は思っている。

死に対してどのような考えを持っているのか尋ねたところ、だれだっていつかは死ぬのであり、恐れる事はないと答えた。その時は人によって様々ではあるが、いつかは皆死んでしまうのである。その上「死ぬ事は素敵なことだ」と母は言った。私の父、つまり夫を見ていて彼のように死ねればと思っているようだ。

父は若い歳で亡くなりながらも、自分の人生をまっとうした。そんな父は「自分」というものをしっかりともち、最後まで生ききった。生をまっとうした父のような人は悟りをひらくことができ、もう充分生きたと認められ、神様から人間として人生の卒業証書をもたらえるのだという。

「人生の卒業証書」を本当に父はもらったのだと思う。いつも自分と戦い、努力を惜しまず、病気との戦いにおじけづくことなく、愚痴ひとつこぼさずに悟りをひらいて死んでいった。

ただ死ぬなら、納得して死にたいという。突然の病気や、事故で死んでしまうひともある。しかしそこには、納得する時間も、覚悟する時間もない。病気や老衰ならば死を自分のものとしてとらえ、考えることができる。

しかし時間ができるだけで、ただ死を待つという事などできる人は少ないのではないだろうか。父の死に際を思い出しながら母は「どんなにわかっているもやはり全く迷いが無いわけではなかった。死の間際になっても迷う時がある」と、言った。父は「どんなに苦しくても生きていたい、家族を生きて傍で見たい」と思う反面、食べることが大好きだったのに食事がのどを通る事が出来なくなった時には「食べられないのなら生きていてもしかたがない」と、心の内を話してくれた。

またある時、体も動かず、一人では何もできず、家族の世話になりっぱなしで苦しくないか、と聞いたら、父は、「そうは思わない」と言ったそうだ。このような父を通して、学ぶ事は数多くあり、その上いつも傍で見守ってくれていた父を、母は「家族を育ててくれている神様だと感じた」と話してくれた。

母の死生観は父の死によってだいぶ変わったという。若い時「死ぬ事は素敵」だとか、「自分を高めていき、満足いく死を迎える」などとは思わなかった。というよりも、そんな事は考えもしなかった。「死」について深く考えることはなく、死にたいと思ったことはあったが、まさか本当に死のうなんて事は思いもしなかった。

父が亡くなったのはほんの2年前でしかない。その時母はもう50を過ぎていた。私は、こうやって死について考え論じてみてはいるが、この述べている言葉が自分の身になる日がいつに



なるかはわからない。近い未来かもしれないし、だいぶ歳をとってからかもしれない。しかし、このように父や、学友の死を通して考えられるという事はよいことである。死が人間の終わりと思うのではなく、いつか母のようにそれが神様から与えられる卒業証書なのだと思うようにしっかりと生きていきたい。

それでは死ぬ事とはどういうことなのか、エリザベス・キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間』を用い、さらに考えを深め、展開していきたいと思う。

### 第3章 死ぬ事

#### 1. 死ぬ事（『死ぬ瞬間』—E・キューブラー・ロス）

死とその過程について、死にいたる人間の心の動きを研究したことについて、スイス出身の精神科医、エリザベス・キューブラー・ロスは事細かに描写している。著者はチューリッヒ大学に学び、1957年学位を取得。その後渡米して、ニューヨークのマンハッタン州立病院などをへて、1965年、シカゴ大学ピリングス病院で「死とその過程」に関するセミナーを始めた人物である。そして1969年に本書『死ぬ瞬間』を出版して国際的に有名になった。『死ぬ瞬間』には、死に瀕した患者達と共にした経験が書かれている。この本は、癱死患者をどう扱うかという教科書的なものではないし、患者の心理の包括的な研究を目指したものでもない。むしろ人生の最終段階とそれともなう不安・恐怖・希望について患者が教師になって話してくれたお話である。

著者は「私の願いは、この本を読んだ人が「望みのない」病人から尻込みすることなく、彼らに近づき、彼らが人生の最後の時間を過ごす手伝いができるようになることである。そうしたことができるようになれば、その経験が病人だけでなく自分にとっても有益になりうるということがわかるだろうし、人間の心の働きについて多くを学ぶことができ、自分達の存在のどこがいちばん人間らしい側面であるかがわかるだろう。そしてこの経験によって心はより豊かになり、おそらくは自分の死に対する不安も少なくなるのではなかろうか。」と述べている。人の死に対する想いはそれぞれに違うであろう。しかし死を恐怖だと思っている人は多くいるのではないだろうか。死に対する想いを学ぶには死を目の前にし、真剣に死について考えている人の意見が一番ではないかと思う。それゆえこの本について学びたいと感じた。

本文は死へ導かれるまでを大きく5段階にわけてかかっている。「否認と孤立」「怒り」「取引」「抑鬱」「受容」である。そして最後には「希望」についてもかかっている。

さてこれらをかんがえる上で大切な死の恐怖について多くの人がどう思うのかその定義を知っておきたい。恐怖であること、いかえるならば死は人間にとって、忌むべきことなのではないのだろうか。今までも、これからもその考え方はかわらないであろう。精神科医である著者の立場からするとそれはよく理解できるという。その考え方の根源としてあげられるのは、人間は無意識のうちに「自分にかぎって死ぬことは絶対にありえない」という基本認識をもっているからであるという。それを著者は次のようにのべている。「私たちの無意識は、自分の命が本当にこの世で終わるとは思っていない。自分の命が終わらなければならないとするならば、それはつねに他人による外部からの悪意ある干渉のせいだ。簡単にいえば、私たちの無意識にとっては、死ぬのは殺されるときだけであり、自然現象や老齢のために死ぬなんて考えられないのだ。そのために、死は、それ自体が報いや罰をまねくような悪い行い、恐ろしい出来事を連想させるのである<sup>(12)</sup>。」

たしかにこれはそうかもしれない。いつか死ぬだろうと思うことより、旅先で何か恐ろしい事件に巻き込まれはしないだろうかとか、恐ろしい霊にとりつかれはしないだろうかなどしばし目先の他から与えられることに人は恐れをおぼえている。「自分にかぎって死ぬことは絶対にありえない」と思うと共に、死にたくないと思う気持ちが強いのではないのかと感じる。著者は、この基本的な事実を知っておかなければ、患者が伝えたいもっとも重要なことを理解することができないといっている。

恐怖感死を今まさに迎えようとしている人たちだけがもっているものではない。著者は恐怖感のなごりを、病院の廊下で、遺族と思われる人びとの言動の中に日常的に見ることができるといっている。本文の例のなかから考えさせられたものがあった。それは長年にわたり喧嘩ばかりしていた夫婦のことである。ところが妻が死ぬと、残された夫は髪をかきむしり、大声で泣きわめき、後悔と恐怖と苦悩から自分の胸を激しく叩く。そして自分の死をいっそう恐れるようになる。彼は復讐法——目には目を、歯に歯を——を信じているのだろう。そして「おれのせいであいつは死んだ。その報いで、おれはきっと惨めな死に方をすることになるだろう」とおもうのである。これはほんの一例であるが、妻が死んでそんな風にすぐに思うのだろうかとはじめに私は思ったが、しかし人間の根底はそういうところからも恐怖が生まれるだろうと感じた。生きている間にいい事をしてあげることができなかった。誠心誠意を尽くしてこなかった。その後悔は死んでしまってからではもう遅いのである。そして、自分のせいで死んでしまったというその後悔により、自分は惨めな死に方をと強く思い恐怖を感じるのであると考えられる。

それに関して著者は次のように述べている。「そうしたことを考えれば、何世紀も前から行われてきた、神（ときには人間）の怒りを鎮め、下されるであろう罰を軽くするための古い習慣や儀式が理解できるだろう。いま私が思い浮かべているのは、古い時代の灰、破れ衣、ベール、泣き女である。これらはすべて、悲しみに沈んでいる人々に哀れみをかけてほしいと願う手段であり、悲しみ・嘆き・恥を表すものだ。もし誰かが嘆き、胸を激しく叩き、髪をかきむしり、食を絶っていたとしたら、それは愛する者を死なせたことに対する罰を免れるか軽くしてもらうために、自分に罰を課しているのである<sup>(3)</sup>。」人の死に対する恐怖とはただ死んでゆくのが怖いというだけでなく、そのような奥深い考えからくる恐怖もあるのだと教えられた。

死について「否認と孤立」「怒り」「取引」「抑鬱」「受容」からなる5段階について述べられているのだが、ここには患者が悲劇的な知らせに直面したときに体験する段階である。これらを精神医学の言葉では防衛メカニズムといい、極度に困難な状況に対処するために備わっている精神のメカニズムである。そしてたいていの場合これらの各段階を通してずっと存在しつづけるものがある。それは「希望」である。希望の章にはかつてテレツェン強制収容所に収容された子供のことについて少しふれている。その収容所には15歳以下の子供がほぼ15000人いたのだが、そこから出られたものはわずか100人ほどであったという。しかし、そのような状況下でも子供たちは心に希望を持ちつづけたという。

太陽の光は金色のベールとなって輝き  
あまりの美しさに私は  
頭上には叫びだしそうな青い空  
確信を得てわたしは思わず微笑む  
世界は花に満ち微笑んでいるかのようだ

飛び立ちたい、でもどこへ？どこまで高く？  
有刺鉄線に囲まれていても花は開く、それなら  
この私だって！絶対に死んだりしない！

1944年 作者不明「陽ざしあふれる夕べに」<sup>(14)</sup>

これは末期患者の置かれている状況に似ているようだ。どんなに現実を受け入れることのできる人でも、心のどこかでは可能性をあきらめず、希望をもっている。著者の患者たちはいくばくかの希望を持ち続け、とりわけつらい時期の心の糧としている。医師たちも患者と共に予測できない何か良いことがおこるかもしれないと思うべきだといっている。しかしそれは偽りの希望ではない。一時的にでも症状が軽くなるかもしれない、思ったより長く生きられるかもしれないというようなものである。それは誰にも予想できないことであるし、あるかもしれない希望である。

「このような希望を——それが現実的なものであれ、非現実的なものであれ——もたせてくれる医師をもっとも信頼していた。そして悪い知らせを伝えながらも同時に希望を与えてくれた医師に感謝していた<sup>(15)</sup>」と医師と患者の関係をあらわしていた。

しかし希望を持つ事に葛藤もある。それには二通りの原因がある。一つは、患者がまだ希望を必要としているのに、もう希望がないことを伝える場合である。もうどうすることもできない苦しさを与えるこの行為は一番困難であるという。そしてもう一つは、患者自身は死を受け入れる気持ちになっているのに、家族が患者の最終段階に来ている事実を受け入れられず必死で希望にしがみつこうとしていることである。

人が生きて、そして死ぬ。簡単なことのようにとても難しいことなのである。誰もが経験する事であるが故にその定義は一つに定める事はできないし、むしろそのような定義などなくてもよいのではないかと強く思う。

最後に、この著書の中で強く心ひかれた部分があったので紹介しておきたい。

危険から守られる事を祈るのではなく、  
恐れることなく危険に立ち向かうような人間になれますように。  
痛みが鎮まることを祈るのではなく、  
痛みに打ち勝つ心を乞うような人間になれますように。  
人生という戦場における盟友を求めるのではなく、  
ひたすら自分の力を求めるような人間になれますように。  
恐怖におののきながら救われることばかりを渴望するのではなく、  
ただ自由を勝ち取るための忍耐を望むような人間になれますように。  
成功の中にもみ、あなたの慈愛を感じるような卑怯者ではなく、  
自分が失敗した時に、あなたの手に握られていることを感じるような、  
そんな人間になれますように。

ルビンドラナート・タゴール

「果実採り」より<sup>(16)</sup>

## 2. 私の父のたとえ

前章のアンケートをもとに少し考えてみたい。人々の中で、死とは苦しいものではなく、悲しいものなのではないのだろうか。なぜ私が3章のサブタイトルを「苦しい」としたのかとい

うと、私は以前死とは苦しいものだと思っていたからである。死ぬならば痛みや苦しみがなく死んでゆきたいと思っていたのだ。前文にあった19歳の方と同様、私にとっても死とは恐怖であった。彼は人に忘れられるのが怖い、私は苦しいのが嫌だ…その恐怖の考え方は違うが、多くの人にとって死とは恐怖なのであろう。しかし今は以前に比べると死を恐怖とは思わなくなった。それは私の父の死がきっかけであった。私の父は一昨年、17年間の闘病生活の末病死した。私の父は本当に素晴らしい人だった。今はこう思っているが、はじめから彼をこのような尊敬のまなざしで見っていたわけではなかった。序文で父について述べたが、父は本当に強い人だった。最後の最後まで父は優しく、そして強かった。父の最期を誰も看取る事ができなかった。はじめはそれを悔やんだりもしたが、ふとまるで私達にわざと最期を見せなかったのではないのだろうかと思った。私達にいつまでも笑っている父の顔を残してくれ、そして強さを感じさせてくれた。

## 註

- (1) 延原時行『無者のための福音』創言社、1990年。
- (2) 浜田綾子「ルターの宗教改革から学ぶもの」『2000年度敬和学園大学比較宗教思想タームペーパー』。
- (3) 延原時行、前掲書、195頁
- (4) 浜田綾子「ルターの宗教改革から学ぶもの」3頁。
- (5) 浜田綾子「ルターの宗教改革から学ぶもの」4頁～5頁。
- (6) 浜田綾子「私が仏教から学ぶもの」『2000年度敬和学園大学比較宗教思想タームペーパー』。
- (7) 浜田綾子「私が仏教から学ぶもの」6頁～7頁。
- (8) 浜田綾子「私が仏教から学ぶもの」9頁。
- (9) 長谷川栄作『生と死の極限に生きて』新潟日報事業社、1995年、No.16、7頁。
- (10) 長谷川栄作、前掲書、No.16、13頁。
- (11) 平成13年12月、友人である19歳の男性にアンケートをとった。
- (12) E・キューブラー・ロス『死ぬ瞬間』読売新聞社、1998年、No.14、11頁。
- (13) E・キューブラー・ロス『死ぬ瞬間』16頁、10行目。
- (14) E・キューブラー・ロス『死ぬ瞬間』205頁、9行目。
- (15) E・キューブラー・ロス『死ぬ瞬間』207頁、7行目。
- (16) E・キューブラー・ロス『死ぬ瞬間』12頁。

## 参考文献

- 浜田綾子「ルターの宗教改革から学ぶもの」『2000年度敬和学園大学比較宗教思想タームペーパー』。
- 浜田綾子「私が仏教から学ぶもの」『2000年度敬和学園大学比較宗教思想タームペーパー』。
- 延原時行『無者のための福音』創言社、1990年。
- 長谷川栄作『生と死の極限に生きて』新潟日報事業社、1995年。
- E・キューブラー・ロス『死ぬ瞬間—死とその過程について—』読売新聞社、1998年。

(卒論指導教員 延原時行)